

## Suggested Answer

もし、火星で草の葉がたった1枚でも見つければ、宇宙飛行管制センターでは有頂天になって、人類が宇宙全域に出ていく構想を発表するだろう。しかし他の、住める可能性のある惑星に生命体を見つけることに心を奪われて、私たちはどういうわけか、この惑星をめちゃくちゃにすることの言い訳をし、そのことに目をつぶってはいないだろうか？

地球に似たさらにもう1つの惑星を発見したというニュースは、私たちが自分たちの惑星に害をなしたとしても、いつだって住み替えがきくという夢物語をあおることになる。逃げ出せる可能性に強い魅力を感じてしまうのは、それが自分たちの、この比類なき惑星である故郷を大切にしなければならないというプレッシャーをいくぶん軽減してくれるからだ。

他の惑星にたった1つの微生物を発見できるかもしれないという期待に身を震わせながらも、その足元で、私たちは自らの意志で大規模な絶滅行為を行っている。かつては当代流行の原因であった、生命の多様性が生まれる場所である森林に対する様々な脅威は、ほとんど忘れ去られている。しかし、今世紀に入って私たちは毎分、フットボールの競技場50個分という驚くべき速度でその森林を失いつつある。それは、今世紀に入ってからだと、グリーンランドの広さに相当する面積なのだ。

環境保護の鍵となる一線を越えずに正しい側にとどまることで、生物圏の産業規模での開発の帳尻を合わそうとする試みは、すべて失敗に終わろうとしている。たとえば、森林認証制度は森林環境の悪化の速度を緩めるのに何の役にもたっていない。どうして我々は自分たちの目の前にある生命の豊かさに対してそれほどまでに礼を失した対応をするのだろうか？その豊かさが、私たちに砂漠に緑のある家の建て方を教えてくれた、ナミビアン・フォッグバスキング・ビートル(サカダチゴミムシダマシ)のような素晴らしい生き物を生み出しているというのに。あるいは、10キロメートルも離れたところから森林火災を察知でき、森林火災のもっと有効な消し方を教えてくれるバーク・ビートル(キクイムシ)もそうではないか？さらに悪いことに、命がけで土地や環境を守っている、まさにそういう人たちが、加速度的に命を奪われようとしているのだ。

アポロ計画が行われていたとき、私はまだ幼い子供であり、宇宙空間の探索に心を奪われるのはわかる。しかし、たった1人の人間を、火星のようにすぐそばの惑星の、生存にも適さない乾いた環境に送り込むには、途方もなく高くつく旅

にそなえて、何年もの訓練が必要だろう。「あそこに」生命が存在するのかという疑問が出されることはよくある。しかし、宇宙の別の場所から眺めれば、私たち自身もまたすでに「あそこに」いる存在ではないだろうか？

おそらく、宇宙探査で得られる最大の賜物は、そのおかげで私たちは自分たち自身を孤島の惑星だと見なすことができ、この惑星で一番感嘆すべきものは私たちの身の回りの世界—生き物同士の関係—さらには私たち自身の中にさえ見つかるということだ。茶さじ 1 杯の土に、地球上の人々より多くの微生物が含まれているのである。

私たちは、困難な時代を生きていることを感じ取っており、そのことで他の世界へ逃げ出すという考えに魅力を感じるようになる。しかし時代がさらに厳しいこともあった。1917 年のヨーロッパの激動のさなか、獄中での寒く暗い夜に、革命的社会主義者のローザ=ルクセンブルクは、自らの危険極まりない状況にもかかわらず、生命力が持つ不思議さと美しさに気づいて、精神が高揚するのがわかった。彼女の心は「想像もつかないほどの未知なる精神的喜びで高鳴る」のである。彼女は、その秘密とはきっと「生命そのものに他ならない」と思い、守衛の靴のかかたが外の砂利を踏みしめる音の中にさえ、「そこには、ささやかで愛おしい命の歌がある—その聞き方を知ってさえいればの話だが」と思うのだ。

2、3 年前、私は黄昏時に初めてあたり一面にホタルが舞うのを見た。ホタルは私の周りにいて、規則的に光を放ち、漂い、暗くなってゆくあたりの景色を明るく照らし出していた。私はふと、ルクセンブルクの言う命の歌のことや、逃げ出すことを夢見るよりはむしろ、世界の現状を受け入れずに、世界を守りより良くするために自らの生命が持つエネルギーを使う、世界中の何百万人もの人々のことを思い浮かべたのであった。